Osaka University Knowledge Archive

Title	ワークショップへの感想文④ 誰にとっての倫理か
Author(s)	Trin
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 121-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86370
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

特集３　「〈応用〉することの倫理――緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」

ワークショップへの感想文④
誰にとっての倫理か

Trin

10 月 1 日のワークショップを私立大学研究推進部門の職員として聴講し、研究のあり方を考えさせられた。怖さを意識しながら沈黙せず学術研究の応用が進むことを願って感想を記したい。

（1）学問の自由：研究者が何らかの根拠（先行研究・論理・データなど）にもとづいて、何かを真理とし表明する自由は認められなければならない。シンガー氏が怒りをかい、真理が何らかの価値や立場性を帯びていても、真理を表明することを研究者はやめないでほしい。

（2）誰のための応用・倫理か：水俣をはじめ当事者ですら一枚岩でないこと、奥田さんの「哲学から倫理を語る危険」などから、学術研究の社会への応用や倫理については、誰のための応用で、誰にとっての倫理なのかを常に問う必要があると感じた。震災の年の大阪大学鷲田清一総長式辞「被災をめぐるさまざまな隔たり」を思い出した。

（3）沈黙しないことの倫理：河原さん・小西さんをはじめ登壇者の皆さんが沈黙せずにこのような WS をオンラインで開かれたことに敬意と感謝を表したい。言語が人を傷つけることとともに、沈黙が人を傷つけることは、倫理学的にもっと語られ、社会で実践に応用されてよいと感じた。

（4）謝罪より批判への応答・対話を：吉川さんの言うように「誤りが許容されるとともに、批判によって修正される」場に大学や研究コミュニティがなって見本を示してほしい。だれかが主体となって今回の議論や緊縛研究を継続してほしい。

（5）機関の責任は問わない方が得策：「緊縛シンポは京大主催」を強調すると、研究機関から研究者への圧力が働く可能性はないか。政府が研究機関や研究者を管理したがる時代に、研究者間の自主的・建設的な対話や解決を願う。

（6）学術研究はやはり社会に応用された方がよい：先行研究をふまえない異分野への応用、立場性を意識しない社会への応用の危うさをあらためて感じたが、象牙の塔がよいとは思えない。人文・社会科学も複雑で両義的な社会のなかでの立場性を意識しながら、社会実装を試行する研究が数多く現れてよい。

自らの業務を通じて、学術の応用、大学と社会の対話を促進したいとあらためて感じた。

（とりん）